

未来への伝言

ウー・オン

この地球という惑星は、すべての生きとし生けるものにとって唯一無二の“ホーム”だ。大気・水・土壌・植物・微生物などが相互に関連する複雑系であり、我々の太陽系の中でも殊に稀な星と言える。

人類は、あたかも我々の無分別な行いから際限なく修復可能な母体として地球を見ており、強欲の赴くままに収奪を続けている。地球の恩恵に感謝する一方で、同時に我々は経済成長と開発のあくなき追及の下、まるで地球を自分らの所有物であるかの如くふるまっている。環境的損失は、すでに甚大であると、まずは思い知るべきである。

世界の熱帯林と温帯林の半分は失われてしまった。湿地帯の半分およびマングローブ林の1/3もすでに消えた。大型捕食魚の90%、海洋水産物の75%は乱獲されている。サンゴ礁は20%が消失し、さらに20%が危機に瀕している。生物種は実に通常の百倍から千倍の速度で絶滅しようとしているのである。乾燥地の農地の大部分は、きびしい生産性減退に苦しんでいる。今や、何十もの毒性を持った化学物質がまさに我々一人一人の体内に残存・蓄積しているのが判っている。我々は知らず知らず、成層圏のオゾン層破壊に加担してきた。大気中の二酸化炭素は30%も上昇し、地球温暖化プロセスを危機的に速め、気候を攪乱している。地球上、いたるところで氷河は溶け出した。人間活動は自然界と同じペースで窒素固定を促進し、その結果、海は富栄養化のため、少なくとも150ヶ所で“死のゾーン”と変わり果てた。すでに、光合成で作り出す物質のおよそ40%を人間たちが毎年消費もしくは破壊しているという。他の種が利用できるのはごくわずかにすぎないのだ。

1960年から2000年までの40年間で、地球上の淡水使用量は倍増し、今や、河川総流量の1/4に迫る勢いだ。コロラド河、ガンジス河、それにナイル河などの水は、もはや乾季に海へ到達することもない。

我々は劇的に変化した世界に住んでいる。それは1900年の世界とは別物だし、1950年の世界からも遠く隔たっている。環境の適切な管理は、市民の取るべき優先的な責任だ。1970年に現代の環境意識の萌芽があった。そのスタイルは対決色の強いものだった。つまり、経済活動を敵とみなしていたのである。今日、我々は対決ではなく協力を推し進めなければならない。経済活動（ビジネス）は、排除するのではなく、同じ土俵で語られるべきなのだ。今、我々みんなが環境保護論者たるべく求められている。

1970年代は「環境保護」がキーワードだったが、それは今、「持続可能な開発」だ。汚染は全世界に拡がり、種の保存もグローバルな問題となった。地球温暖化と気候変動は今日的課題であり、環境管理が必須の時世である。

グローバルアジェンダ21によれば、2020年には人類の3/4が海岸線から60km以内の沿岸部に住むようになってきているらしい。ミャンマーの海岸線の総延長は14,710km。メイツ群島は、サンゴ礁の上に800以上もの小島が集まる場所だが、多くの海洋生物、マングロー

ブ、海草、そしてサンゴがあまねく存在する。ラカインやイラワジ、モン州の沿岸部もまた然り。しかし、これらの沿岸域は、最も傷つきやすい生態系でもある。サイクロンや津波、暴風、洪水など自然災害の脅威にさらされる土地だ。

1962年、私はイラワジ管区の森林官だった。マングローブはほとんど手つかずで健全だった。資源利用はよく管理され、生物多様性が保たれ、ワニやトラ、マングローブ象もいた。野生動物相は本当に豊かだった。魚やエビもおびただしく、ボートに乗っていると自ら船内に飛び込んでくるほどだった。むろん、気候も穏やかで安定しており、自然災害のようなことは全く聞かなかった。

1970年を過ぎたころからだ。人口増による失業と食糧不足のため、マングローブが無慈悲に伐採され、薪炭として利用されるようになった。また、水田に転換するため、マングローブは皆伐された。私が1980年に再びイラワジを訪れた時、生い茂っていたマングローブ林の多くが裸地にされ、食糧確保の名目でコム作りが政府の優先施策となっていた。外貨を得るため、米の輸出はまさに最優先の政治目標だったのである。貧困緩和と社会経済開発は当時のスローガンだ。世界銀行も事業を後押し、巨額の借款マネーをつぎ込む。それでまた多くのマングローブ林が伐採され、水田に転換されたのだ。

環境劣化は時代の趨勢だった。ヘリティエラやエクスコカリアのような潜在優占種はほぼ完全に消滅した。ワニやトラも姿を消した。マングローブ象さえも地元の村人たちと衝突し、森林省はあえなく、より安全なラカイン地域に象を移動せざるを得なかった。カワウソやウミガメのような海洋生物の多くもまた、生存の危機に瀕した。マングローブ生態系全体がダメージを受けた。私は思う。2008年5月に襲ったサイクロン・ナルギスは、イラワジデルタの人々が自然をないがしろにしたバチが当たったのだ、と。

もう、サイクロン・ナルギスのような悲劇が二度と起こってはならない。こんな災害を逃れる唯一の実行可能な方策は、マングローブを再生させることに尽きる。天然更新でも人工植林でも良いから、森林局と協働し、地元のコミュニティを参画させ、彼らに正当な権利を付与して管理を委託することだ。そうすれば、古き良き時代のマングローブ生態系に復元できる。

2009年、私は環境水俣賞で頂いた賞金すべてつぎ込んで、ボガレーのビョンムエ島にマングローブの森を造った。私の哲学は、「木を守ることは新しい木を植えることに優る」。すなわち、現存する森を保護するのが第一で、新しく森を造成するよりよっぽど有効だということ。私は期待する。すべての天然林を保全し、環境教育と自然保護の目的で「マングローブ公園」をつくれぬか。そして可能ならば、究極的には、「マングローブ科学大学」や「ミャンマー臨海研究所」のような教育機関をつくりたい。

これが私の未来への伝言である。このメッセージは少なくともピンダイエの人々へ向けられているが、イラワジデルタ、さらにミャンマー全土の沿岸住民へ、そしておそらくは世界中の心ある市民にも届くはず。そう願っている。

(FREDA 元会長、2018年7月11日逝去、享年91)